生花早満奈飛
全

叙

南里亭主人稗史著述而以業曾
嗜ニ狂歌俳諧ヲ明友交厚或日一小冊
携ヘ予請序閲ニ生花指南之圖式
及口傳數条ヲ挙タリ子カ生業ヲ逍フ初而
知ヌ生花ハ業ヌ姿造雖手練ノ業ハ易ト得

實學難覺師家所謂印可不漏
之秘事委紙上題以而導初心
生花志有從據此書可學不待
師知真旨之捷經生華早學題
而其断述者浪花逸士

一本亭魚鱗

生花早満奈比目録

生花全體之圖解
躰ノ枝 又陽ト云
添ノ枝 又中ト云 五ノ枝を根じめト云
枝別に挿 亦モ留
躰添合せて五備の全躰を具足したる形なり
是より思ひ〳〵に姿を変化して生るを実体と云
五備全体実体の事を委しく記して
檀特葉蘭すべて大葉ものゝ全体
蔓草たるひ物 全体

朝皃などの蔓ものは柴ゟ女竹を体よりく右のふりにて釣花に生る
鈴かけいちご萩などの志なひ物添り花の全躰
柳のるいたるゝ物の垂花全躰
真の行全躰
根〆
若芦の全躰
水草全躰
真の真口傳

杜若全躰真
木賊の全躰
馬藺全躰
真の前
葉蘭
全体行
紫苑全體行
紅蕉全体
行
川骨
真の行
水葵
全躰
行
一
二
三
四
五

連翹藤のるゐ全躰かけ花
鷹爪山吹
置花まて
なびく物の
全躰
蔓のびもの
全体
二種一瓶全躰
真の行
葦ニ菊
五ノ枝を余花に
全体をとり次め

めだる柳に白椿
行の行全体
急にさざに小菊の類も
此の定めにくとるべし
器 車僧
梅 草の真
尺八切
枯黍に水仙
行の真
器 二重切

掛花の中菊全躰

女良花全体

格外のいける

あれども五体の姿あることを示して

此姿は二五の枝なく小枝ある体を備る

二重切いける

一瓶全体

椿に連翹の全躰

釣舟に二種一瓶の姿

大懸篭に二種一瓶
一枝に三五の備ふる全躰
柳に水仙 行の真
蘆に杜若の全躰 行の真
芒に大菊 全体
草の真

一なげ入ハ器よのかわるべき花よてのふざれども古今茶才あまくもつぱら好こ用ひ故まその秘古文をもつれ器のごとく花葉まらく五備をとるべし　杜丹芍薬芙蓉の大りんものハ花のべんにて五備の全体を含ませ花びらのゆしき所ハべんをかさとりて五備を全く調ふ
是等ハ秘中の秘古文なりしるく面授に傳え形葉水引等なりハ五まで入よおくべし　なを口傳にあり

一輪一葉投入全躰

生花に用る言葉

一 麗敷　花の入るを誉る
一 流　花の根もと乱まぐるを云
一 開まもて　花顔を客位にむかへをくこと
一 根入　おもうごく花の根しまりを云
一 三役　躰添根〆の三本をいふ
一 冠葉　花より上にのびたる葉をいふ水草に多く有べし
一 露落　一 打隠　一 向枝　一 色切　一 長競　一 見切　一 段々
右の七言ハ生花に嫌ふ第一の事にて是より変化して九ケ條の避病あり次に器をそつくさとかくべし　生花生しに並ぐ器ス

左
右
左
右
赤
白
赤
花器名目并　花止圖式之事
一重切
尺八切
二重切
百度切
車僧
千代野
獅子口
庸軒
浅沢
橋
置筒

船
油さし
沓
筒守
鐙
宗仙かご
簑かご
たくのこし
頭巾かご
簗魚簗
てんぺつ
角かご
たくちまき
かや壺
氷柱ぐさ
旅枕
鉄なつ
細口
落なぐさ
中口
碪
桔梗口
唐人笠
四方ぐち
角なぐさ
馬だらい

花器金鉄竹籠陶器楽焼家々のこのミに随ひて数多あれども大ていこれらの名目をかたどりて変形異体の雅品となしたるなり新古をえらぶべし

○楳花　紅白八重ひとへ小枝多く矯にくき物之弗海とかざりて後さむべし白梅ハかろく宗情ニ挿紅花ハ多く枝振しく挿なり古瓶を好む早春ニハ客ニ着もゆうニ古吾の心を含く挿べし

○柳　春ハめやなぎ四季ともニ詠めなり水辺を好む心あるく下ニ池川など有ようニ働かすべし

○椿　数品なり白玉を上位とまで小枝短く花日うらニ咲く自性之葉くばりを先ニして花を後ニ結る多く獅子口又ハ根ぞへニ用ゆ

梅 紅梅あまり
器さび竹一重
落紅梅 水仙
器南京 染つけ
松竹梅
釣舟
莟牡丹
柳 山茶花

○福寿草 卓下にあるひハ廣口砂鉢などの根ぞへよし
○連翹 かけ花ま多し壺花またハ好まずといへども搞柱などの大竹又ハ壺生も風情あり
○高麗菊 木花の根〆に用ゆる事あり杏の取合はよくうつりよし一種小器のかけ花によし
○笑靨花 はんかう切などの竹によくうつる白笈百合など花口へ立こミ生も面白し
○金雀 矯よく自由ある枝あり余りためると猶しこの尾のごくはしく花あるところハ一種入にしてよし
○木瓜 くもぢろく見返なし菜花など根〆にして風情あり

白桃
器 唐銅
彼岸桜 椿
器 ひしぎ竹
かやうな器しつらふるハ七ア
正面より見るやうに揃べし
此まへをほく器にいるも同然に致
すべし

○桃彼岸桜 切者なくとハ枝ちらさし二種の取合ホ
むつかし多くハ菜種花やがなどにいけらふ桃ハ枝天へ
突とくまするどし故にやさしき根〆をしてく花のひんを
付べし彼岸桜ハ花繊り肝要と尤一種入に限る

○桜松ハ制花のうちにて印可の上ならで入がさし去ども
初心より揮流もあり桜ハ折るしまさまく疎を入ば
生る之花落ちりたれバ落椏の上へならべ置も花をお
しむ風情ならし

○杜若 葉沢山にさして生ぶりにかかハらバ葉の自性を
よく背かぬやうに揃べし須つ葉あさしとらへる名義く

○海棠 一種入なり金銅の古瓶によし手練をのべ

○紫羅蘭花 此花縞る蘭にあしらひて能うつる

○山吹 陸木にて水辺をこのむ柳ハ高の木にて水
辺に遠ふ此花ハ低の木にて水にうつる掛籃釣舟ホによし

○白芨 葉づらひ馬蘭万年青に類しておしやさう
さまに生る迄かけと取合せてよし

○菜種ハ梅めしの根〆に用ひ一種入にハせず

○大手毬 花のうちならびて猪の目に成やもし
うけ花にハ入ぬ花なり壷籃によし

○躑躅 好みて入まじ霧島を唐金の古器へ入るハ能ものゝ

芍薬花
爲朝百合花
かきつばた二瓶
冠葉ちらふ

○辛夷 木蓮志でこぶし同格の生方一種入ニ定る花
なり枝ぶんを付べし
○卯花 小器のさび竹か銅器ニ入盃し随分花を白
く見せるやうニ器の取合せ肝んく十姉妹魚ゝ添
ニ入るく自性をうしなはゞ弱枝ニ見へて強き枝なり
○牡丹ハ傳花なり大きさ振やうニ挿至て大輪なるハ
一輪入もよし 芍薬も同格なれども葉どりのまでし
はぎやうニ挿志かれども葉を切るをいましむ
○百合花 花茎つよくて生よし 姫百合花ちいさくて
見ろく潜し 竹鳴百合ハうつむくが自性ゆゑ心得て生べし

○夏黄梅 舟釣生よろしつまよし二重切の躰ニも生る
○鷹爪 小枝をえらむうちニ風情生る類よきぬなり
ち枝すなしく花器ニ取合はべし
○狭竹桃 一重咲よし 花多きハ見せるし用ゆ此花
関東ニ多し
○紫陽花 花おもくて低きあし 花をきらして用ゆ
○びやう柳 此花金糸梅ともいふ 魚花ニ詠めり
○鉄線花 蔓ものハ釣花ニ多き先中えと花を
細り葉も佳しくし 利葉を直べし
○美人草 中笑を用ゆ 満花まれバ散やすし

美人草
夏黄梅
姫百合

○罌粟花美人草にひとしく祝儀にハ嫌ふ
○萱艸葉のとぢめをなどさ高低をつけて左右が葉を花のくきへひつそりと付て挿べし口伝なり
○檀特花　葉ぐされハ図にならはせしごく留葉ハ曲なるを低くつのふべし芭蕉なども同格の生方なり
○萍蓬草花に葉を添へくきぶ大槩蓮花にひとし
○釣瓶水盤等によし水上がぬる物なれバ花葉の茎に細き竹をさし其穴へ茶の抹或ハ土器の粉を入て生べし
○桔梗古瓶によりてさきなどなしらいてよし

○仙翁花がんぴの種類肉黒のかんそう筒に入てよく
うつる馬蘭木賊などのあしらいに用ゆ
○射干午時まぐの花なり鉢ハ其儘入て添ものハつり
合を見さだめ取る葉を添へ副生る鉢添とも花
の茎を引さげ程よくつくる市店に売南京といふ宜し
○大明菊古器の懸花によし茶室に風情あり
○木賊直に立るが自性なり瓦形などに入て小花を
あしらい用ゆ一種入も雅趣之上手の入さあり
○夏菊近年式花の種類多く造り出せ秋菊と
同じ心あるべし葉づくろひのまてうし有べし

白大菊
名月

蔓梅もどき

蔓先

中菊根じめ

○紫菀 葉づつひ至つて〳〵むつの〳〵葉の折合せ一段二段入るとも五段に及ぶと同じやうに集て見苦し葉ぶおの図を見合せて肝要に會得すべし

○瞿麦 此花ハ沢山に入るがよし三段五段に分て入べし

○春羅 此花手放れやくせざれハ花ちほど安し

○澤桔梗 うけ花入のものなり並花の時ハ竹にうつしらい物して根〆にすべし

○蘭 茎をこのむハに見せざるがよし擬に傳ふ有り

○木槿 禁花なれども時宜により生ると有

○紅蕉 大む○だんどくの生方なり

○菊夏より秋へかけて百瓶の内六歩ハ菊なり故に秋の分ハ菊を数瓶いくしぬ諸花の生方此菊の分ハよく味ふべし尤大中小の数品その自性をよくわきまへて揃べきなり大菊を縮ふ切小菊を脊高くきふれ性に違ふと知べし

○女郎花この花殺おくまがりなるが自性にてよしなよしと風に靡く心を云のみあり

○秋海棠 祝義古実に用ひぼよく水を上させて揃べ

○すゝきハ類多けれども十寸穂の薄を口傳とするべく専すら咲めを生るなり

大菊雪白

樺大菊

○笹龍膽 根〆に用ゆ 蔓あるハ釣舟によし

○雁来紅 水を上かぬる物なれバ志べしの添なり

○八朔草あるハ枝ぶりに拘らバ珎しきを肝要とす

○荻 をさき花落端などによし 秋の物さミしきさまが たゞよふる花なり其の心を専らに含むべし

○白木 おけ釜ともに一種入なるべし

○紅葉楓 白膠木 黄櫨 柞 黄楊 地錦 絡石 梅擬 柿 銀杏 その余なふの紅黄にてりさる物を取なつのふ 中にも楓をもつぱら紅葉といふ大器に入べし 深山峯谷などのさま海を移して入るなり

○亥子梛又狗子梛これハ梛の芽なり紅皮をぬがさるうちハ白椿を根〆とし芽を吹て毛つきたるハ赤椿の根〆を用ゆ尤も椿にハ限らバ取合せよく添べし

○万年青 葉づかひに傳あり実ハ葉のうらへ出るが自性なり考入べし

○梅嫌 葉をことぐくとりて実ぞのりにして入る蔓と二品あり蔓もどきハ釣生にして宜し都て生花ハ花葉に限り実ぞありハ用ひバといへとも色づきたるハ捨るによしなし

○残菊 花の付際より茎にまがる物なれバ生花によし

野菊 よめがはぎの花之

若枩菊 根メ

○冬至梅椿などの根〆にして生る目出度意をゐてよし
○寒菊葉の色こげて雅趣あり専ら葉を賞して入べし紅白の寒菊ハ花を賞すべし
○水仙葉のうらへに傷あり根元のそくまと称す白皮を抜て葉を二まいづゝ重ね捻ぢれたる癖を直し又元のごとく袴をきせてしめを造るべし
○寒竹葉の出かけるを用ゆ流しかけて入るをきらふ立花に生てハしらいにすべし
○迎春花懸花釣瓶などに入て相応すべし
此余四季花木何れども後編にゆづりて略す

附録應接物之分
○柳 金雀 馬藺 葉蘭 木賊 薄 まへに添べし
○檉柳
ひとゝせに三度花あり されど賞すべきほどの花にハあらず 水盤大器の物にとり合すべし
○糸杉 女榁
○圓柏
立うけともに用ゆ 柳にをなじ
葉しげくこもりたるを見込として根際の花にそへさらさを付て入べし 鉢をさすとも入る

枇杷の花
寒菊
水仙
山茶花
水仙

○錦木

置花によくうつる金蕊四方口に取合よし

○猿猴杉

ながき一枝にたくふさ有を見立て入べし根添にまゝ

椿などもよし随分つよき花をいらふ

○松

をさき花にいるゝ時ハ根添を用ゆれども根添に口伝あり

松に傍近の羽ひとつふさく故なき花をいらふこと迄

○蒲　江浦　芦

此るい水盤のいけかたよし葦ハ口伝ものなり

生花起原の解心得べき条々

○生花の起原ハ和漢ともに往古より有しとあれども

今のごとく法式の六のしきるよハいけばな然るを道を

宗とせんとて釈尊の拈華微笑上宮太子の三教一躰

楊貴妃または袁宏道が古など附会して生花に五徳

五能あるよしを害の説して人に勝る族あり生花の法

式盛に規矩流く唱へ来りしハ瀬東山殿下の比物好より

己来のことにして茶方の生花に弘むる也故に千家遠州

石州など茶家の流義を仮用ゆ元来流祖遠州の奥

法式たる受せられしよりいけ花躰の姿に相応して

其流を見立なづけゝる物なり故に自己に姿をつくり
野しく流を一流さるに難からんやされども一流を唱との
一流の規矩を定め何藝にても其本體を失ハぬ様にせ
ねバ他を教ゆる師といふべからず本躰といふハ人の五體即
天地の五行なり和歌に篇序題曲流といへる歌の本たいに
して一首の五備なり今世都鄙太平の徳沢に浴し諸
藝下俗に流れ業賤しきに蔓り上手有りて妙なし
業ハ覚へやすく心ハ悟りがたし物皆知好楽の三有り
生方をと習ひても本躰のこゝろを知ざれバ生花を知のく
みして世俗のみの倫倍よく〳〵の倫倍まふべきなるべし潮ハ花汲め
の癖病を知らく業におそるハ花を好むをのよして楽しむ
者に及ばバ本姿め五備の全躰を會得して実体の働をた
し姿に曲を造るときハ生花を楽むに至り四季折々の
たのしく究りなかるべし
○一二三四五の全躰をと索めしくらふ時ハ歌の五備五行の木火土金
水に故に万物土より生じ土を母の位とハ易の坤土なれバ
三の枝を躰中の躰と心ハ一二四五皆此の三の枝より働をな
すべし歌の題を居る五体の三位にして中央の五文字へ
生花の本たいを味ふべし
○凡生花を自在に挿んとなれバ草木花葉の出生山沢陸

園その草木の好む所を知るを第一とし然れども草木数多
にして方花をいるゝことむつかし本艸家にあつて習ふ時は
知べけれども本草の書は彼に似是に等しきと要を摘く
教る故に容易からず只花市にて扱ふ所の草木をも
つぱら市店にて尋きとめて覚べし市店にまじらざるは
独楽といふとも挿べからず数年上達の後には自
然に得篤も有なり

○初心の内は何によらず挿なふて試ゝ手練すべしと
いへども後園に樹なき人は名もしれざる草木を
生ばしく有ふれたる草花を需て生習ふべし山
野自然生の花枝は力なくして自由ならず市店に扱ふ
花は茎ふとく花首つよし然れども技ありて矯よく
し常に手練して矯ならふべし

○花といへは何によらず賞美の言葉なり花嫁花香など
よくいふ也故に柳に水仙金雀に椿その余二種
の取合せを挿とも花たる物を前に力ある物を後に生るは
べし甚る人も根〆の花を賞して本物を次にする
心得有べし数瓶ならべ生る会席などにては
花物の咲いづる前後を大概准になすべく葉物は
雑物なれば末席に置くなるべし

○生花を入るゝにせんとく小瓶すゝ器に枝多くさし
孔雀の尾のごとき近来奉納の席などに入及びぬ
当流にてハ好まバ大概花器の丈を一尺なれバ
枝一尺五寸だけにて躰を定むべし瓶器の一丈
半を定すところへ長短すづゝの差略有べくよし
水盤砂鉢広口ものゝ舟形などハ口の広すを一丈
半にして猶席の広狭を工風すべし

○花器の名目をまるゝ生花者流の事二義なく
是も流し好みよりて限なけれど大ていその本
躰名目爰にて記し置ぬ

○立花に真といふを生花に体といふ躰添を主として
五備をなしハ当流に陽中根〆と三の枝を天地人
の三役とも陽ハ天にして冠花を用ひ躰なり中ハ
人の位にして半笑を挿根〆ハ地陰にして蕾を
さすべし則ち添の枝これなり多枝挿とも此
三の枝より変化すると心得べし

○惣体花木を挿にしたる心を含て枝のこけ
ざる池中うに見すべし水盤ハ池沢に水草の生
出る心もちにて広に一丈半なき草花を
三株ばかり並べ生にすべし猶図にて味ふべし

○三都及び繁花の地にハ生花師家と唱ふる者数多くして志有の好士習ひやすし辺鄙の地にハたまたま志あるの士も需むべき所なく徒に過るハ或ハ都會といへども師をもとむるに憚りあるともがら或ハいとまなくして志を空しくなすの壮士をこゝちびくるに著ハす所の書なれバ先初心の士ハ此書によりて生花の道をば独学に倣ふべし

○毒木毒艸挿花の水上會席奉納法楽祝言追善軍陣旅宿その外生花者流のおもてかなるざれを後篇にのせて漏さることなし

生花早學 後篇 近刻

同 口傳抄 近刻

生花百瓶圖 全三冊

四季百瓶圖 全三冊

遠州流正風花姫 全二冊

抛入花傳書

天保六乙未年正月發行

書肆

大阪心齋橋通博勞町

伊丹屋善兵衛